

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

6月7日にエプソムで行われたG1英国ダービーで、大本命オーストラリア(牡3)に騎乗し優勝を果たしたジョゼフ・オブライン騎手が、今回のこのコラムの主役である。

93年5月23日生まれのジョゼフは、ダービーの2週間前に21歳になったばかり。それでいて、ダービー制覇はキャメロットで制した12年に次ぐ2度目のことだった。ダービー初制覇の時、ジョゼフは19歳で、レスター・ピゴットが54年に樹立した最年少記録の18歳7カ月には少しばかり及ばなかったが、そのレスターの2度目のダービー制覇は21歳7カ月となった57年で、すなわちジョゼフは伝説のレスター・ピゴットよりも早く2度目のダービー制覇を果たしたのである。

改めて記すまでもないかもしれないが、ジョゼフ・オブラインは、愛国のトップトレーナーでキャメロットやオーストラリアの管理責任者でもあるエイダン・オブライン調教師の長男である。子供の頃から父に連れられて競馬場に来る姿がテレビカメラなどによく捉えられていたジョゼフ。物心つく頃から乗馬をたしなみ、競走馬にも騎乗していた彼がプロ騎手としてデビューしたのは、16歳になったばかりの09年5月のことだった。言ってみれば、あらかじめ定められた宿命に抗うことなく騎手の道を歩み始めたジョゼフは、恵まれた環境を存分に活かしてメキメキと頭角を

現していった。10年、ゲイリー・キャロル、ベン・カーティスの2人と勝ち星同数の横並びではあったものの、愛国における見習い騎手リーディングのタイトルを獲得。11年5月にロ德里ックオコナーでG1愛二千ギニーを制してG1初制覇。続く12年には、前述のように英ダービー初制覇を果たしたのを含めて、なんとG1・10勝。年間87勝を挙げて愛国におけるリーディングの座を奪取。そして、13年には、芝平地における愛国の年間最多勝記録を20年振りに更新する126勝をマークし、2年連続リーディングと、まさに絵に描いたようなトントン拍子の出世を遂げ、愛国騎手界の第一人者と言われる存在となった。

日本で言えば武豊騎手のデビュー当時を思い起こさせるジョゼフ・オブラインの躍進ぶり、今後はそれこそ現在の武豊騎手のように、いったいどれだけの記録を作っていくことになるのか、具体的に言えば、永遠不滅と言われたレスター・ピゴットの「英ダービー9回制覇」を塗り替えられるかなど、近未来に達成されるかもしれない快挙へ期待を膨らませるが普通だ。だが欧州で今、関係者であればファンであれ、ジョゼフが将来作るであろう記録に思いを馳せている者は、ほとんど居ないのが実情だ。なぜかと言えば、本人はもとより周辺にも、ジョゼフが長く騎手を続けると見ている者はひとりも居な

いからである。

身長5フィート11インチ(約180cm)のジョゼフは、普通の生活をしている際の体重は125ポンド(約56.7kg)ありと言われている。普段から、斤量の軽い馬には乗らないから、たとえば2歳牝馬に彼が乗る機会は今と比べて良いほどないのが現状だ。12年秋、お手馬だった2冠馬キャメロットが凱旋門賞に参戦した時に、鞍上はF・デトリーに乗り替わった。凱旋門賞における3歳牡馬の斤量56kgはジョゼフにはきつく、落そうと思えば落とせるのだが、体を壊す危険を冒してまでの減量はしないというのがオブライン親子の基本方針で、出された結論が乗り替わりだったのだ。

56kg以下は出来るだけ乗らないようにしていてもなお、シーズン中のジョゼフは常に体重維持との厳しい戦いを強いられており、今年3月のドバイ開催でも炎天下をカッパを着て走るジョゼフの姿が目撃されている。すなわち、現状よりも更に減量がきつくなった昨には、ジョゼフは騎手を辞めるであろうというのが、欧州におけるコンセンサスなのだ。

若き天才ジョゼフの騎乗も、実はあと何年見られるかどうかからず、それだけに欧州のファンは、その姿を今、我が目に焼きつけておきたいと思っているのである。